

第1回総合教育会議会議録

令和7年6月24日（火）

場所：国立市役所 第4会議室

出席者

国立 教育委員会	市長	濱崎 真也
	教育長	雨宮 和人
	教育長職務代理者	操 木 豊
	委員	大野 孝儀
	委員	佐藤 有里
職員	委員	篠原 朋子
	教育部長	橋本 祐幸
	教育総務課長	齋藤 隼人
	教育施設担当課長	島崎 健司
	教育指導支援課長	荒西 岳広
	指導担当課長・総合教育センター所長	小島 章宏
	生涯学習課長	井田 隆太
	公民館長	清水 周
	図書館長	氏原 恵美
	指導主事	小柳 津章文
	指導主事	金井 麻衣子

国立市

令和7年度 第1回総合教育会議 協議・調整事項

日時：令和7年6月24日（火）午後1時から

場所：国立市役所 第4会議室

○これからの国立の教育を考える

～今、求められる子どもたちの学びについて～

- ・GIGA スクール構想による1人1台端末環境の活用について
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について
- ・多様性を包摂し、一人一人の意識を高め、可能性を開花させる教育の実現（共生社会の実現）について

午後 1 時00分開議

○【橋本教育部長】 皆様、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまより令和 7 年度第 1 回総合教育会議を開催いたします。進行を務めさせていただきます、私、教育部長の橋本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、当会議の主催者であります濱崎市長より、開会のご挨拶をお願いいたします。



○ 1 市長挨拶

○【濱崎市長】 皆さん、こんにちは。国立市長の濱崎でございます。市長就任後、初めての総合教育会議にご出席賜り大変ありがとうございます。よろしくお願い申し上げます。

本日ですけれども、「これからの国立の教育を考える～今、求められる子どもたちの学びについて～」という会の副題、これを議題にしております。この議題とした背景ですけれども、昨年12月25日に中央教育審議会から「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」という諮問がなされております。皆様ご案内のことと思いますが、教育は、国が大枠を決めた上で、自治体それぞれの考え、そして学校現場の判断でやっていくという大原則がある中で、今、社会の変化がかなり激しいといわれ、変化という意味では、多様性の包摂とか不登校のお子さんもすごく増えている、あるいは学ぶべきことが技術の進展に応じたり、社会情勢がすごく変化してきている中で、変わったほうがいいのではないかという問題意識は、この場の皆さまで共通のものがおありかと思います。

そのため、今回の取組としては、国が 1 回整理したものを我々の目でも見て、議論してみたいと考えております。昨年12月25日の中央教育審議会の諮問を取り上げられた、これからの時代に相応しい学習指導要領の在り方が、先ほど触れた諮問を基に検討されるということになりますが、ここで議論されることが、かなり幅広いですが、国立市にも当たることが多くあるのではないかと思います。そして、今後策定していく教育大綱をどのような形にしていくか、今日の議論なども参考にしていきたいと考えております。

今回のテーマは、様々な観点から議論ができるかと思いますが、今日は、「G I G A スクール構想による 1 人 1 台端末環境の活用」と、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」、「多様性を包摂し、一人一人の意識を高め、可能性を開花させる教育の実現」、これは共生社会の実現ということにもなると思いますが、その 3 点、議論を深めていければと考えております。

まず担当から、これらの内容に関して国の動向と市の現状等について報告を受け、それから、子どもたちの学びがより一層充実するにはどうしたらいいのか、委員の皆様から忌憚ないご意見を伺いたいと考えております。

それでは、今日はどうぞよろしくお願いいたします。



○ 2 教育委員会挨拶

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、教育委員会を代表し、雨宮教育長よりご挨拶をお願いいたします。

○【雨宮教育長】 改めまして、皆さん、こんにちは。市長もどうぞよろしくお願いいたします。先ほど濱崎市長からもありましたように、市長が12月に就任されて初めての総合教育会議ということになります。市長という職責と教育委員会という、その所管ということでいえば、組織上は別々になっていて、それぞれ権限が分かれている形になります。ただ、この総合教育会議という場におい

ては、市長が教育について大いに語っていただいていたいい場だと思っていますので、我々、教育委員会、教育委員と様々な議論を通じて、国立の教育を一步でも二歩でも前進していけるようなことを、お互い協力あるいは支援を頂きながら、よりよいものを目指していけるような、そういう場として活用させていただければと思いますので、どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。

続きまして、教育委員の皆様からも一言ずつお願いしたいと思います。最初に、教育長職務代理者、操木教育委員、お願いいたします。

○【操木委員】 こんにちは。操木と申します。よろしくお願いいたします。私はずっと子どもたちと一緒に過ごす、そんな仕事をさせていただいてきていまして、今もまたそれが続いているのですけれども、その中でいつも子どもはとかく困っている子といわれる子どもがいるのですけれど、困った子、困った子という大人の言い方があるのですが、そうではなくて実は子どもは困ったではなく、子どもたちからすると困っているのですよね。だから、そういった子どもたちの声をいつでも聞いていられればいいかなと思ひまして考えております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、大野教育委員、お願いいたします。

○【大野委員】 本日はよろしくお願いいたします。大野です。長年教員をやっていました。それで、そのときは今日の授業をいかにきちんとやるかということで精いっぱい、とてもではないけれども教育を俯瞰して、こういう教育がいいだろうということを考える余裕はなかったのですけれども、今はこの立場になって、やや客観的に状況が見られるかなと。そのときに今すごく教育界がチェンジする、変化する、そういうポイントなのかなということをちょっと思うのです。一方で、現役のときには、教員のときには、ゆとり教育ということでさんざん学校内で話したのだけれども、結局それがポシャってしまったという経緯もありますし、もっと前で言えば、70年安保で東大の紛争はじめ、世の中をどのように変えていくのだという学生運動があったのだけれども、それも結局はなくなって、要するに昔から学校教育の在り方というのは私から見ると変わらないのです。だから、このまま変わらないのではないかと、もしかしたらいろいろな状況が変わる中で変わっていくのではないかと、期待感と両方あり、その辺を今日いろいろざっくばらんにお話しできればと思います。よろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、佐藤教育委員、お願いいたします。

○【佐藤委員】 今日はよろしくお願いいたします。私は野外教育をずっと学んできたこともありまして、子どもたちとの野外教育と学校教育をつなげる役割ができたかなと思ひまして、今、教育委員をさせていただいています。自分自身も子育てをこの国立でしてきて、とても田畑があったり、多摩川があったり、自然の中で子育てをする楽しさだったり、谷保天満宮という歴史ある場所も身近にあったりというところで、今日は国立市らしさの教育を皆さんと深められたかなと思っています。よろしくお願いいたします。

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。続きまして、篠原教育委員、お願いいたします。

○【篠原委員】 篠原と申します。本日はよろしくお願いいたします。私はマスコミの中において教育ということを今まで考えてまいりましたが、自分の経験を振り返ってみても、昔は教育改革という大きな文字が新聞の見出しにあったりした記憶があるのです。だけれども、最近、中教審とかいろいろなところで大きな改革をしようとしているのに、ほかのニュースのほうが大きなウエイトを占めているのか、教育改革という文字があまり一面トップを飾ることがないなということをすごく感じて

いまして、でも、それはとても残念な、といいましょうか、日本のこれから、それこそお米がどうか最近言われていますけれども、いろいろなこれからを考えると、では、教育はどうなっているのかということはやはり大きなテーマだと思いますので、国立という場でそういうことを含めて考えていけるチャンスを頂いているということで、とても私自身も勉強になっています。今日のテーマも1つ1つが大問題だと思いますけれども、ぜひいろいろなお考えを聞かせていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

◇

○3 配付資料の確認

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。それでは、お手元の配付資料を確認したいと思います。

まず、1枚ものが「令和7年度第1回総合教育会議 協議・調整事項」というものがございます。それから資料1として、カラー刷りで「これからの国立の教育を考える～今、求められる子どもたちの学びについて～」ということで、2点の資料がございます。過不足ないでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

◇

○4 協議・調整事項

○【橋本教育部長】 それでは、続きまして協議・調整事項「これからの国立の教育を考える～今、求められる子どもたちの学びについて～」でございます。荒西教育指導支援課長よりお手元の資料に基づき、国の動向及び本市における現状等を説明させていただければと思います。

では、荒西課長、よろしくお願いいたします。

○【荒西教育指導支援課長】 よろしくお願ひいたします。今回のテーマが「これからの国立の教育を考える～今、求められる子どもたちの学びについて～」ということですので、まず国の動向として、先ほど市長からもありました令和6年12月25日の中教審の諮問の内容を確認したいと思います。この諮問で示された現在顕在化している課題というものが3点挙げられております。それが資料1です。

1点目の課題は、「多様性を包摂し、可能性を開花させる教育の必要性」です。後ほどもお示ししますが、現在、各校の各学級には多様な児童生徒が在籍しています。この図にあるように、「学習面、行動面で困難を示す」児童生徒は35人学級ですと3.6名、それから「日本語を家であまり話さない」児童生徒が1名、「不登校傾向」にあるお子さん、「不登校」も合わせて4.8名、大体このような子たちが平均的にいるのが現在の学級だということです。「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに多様性を包摂し、1人1人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題とされています。

2点目は、「学習指導要領の理念や趣旨の浸透が道半ば」というところです。資料にあるとおり、児童生徒の社会参画意識の低さ、それから深い理解を伴う知識の習得、自律的に学ぶ自信、こういったものが国際的に見ても低い現状があるといったところでございます。これまで育成を求められた児童生徒の資質・能力のうちに成果が上がっていない力、これをいかにして育成を図っていくかが課題とされています。

3点目は、「デジタルを活用した効果的な学びについて」です。デジタルの活用は様々な可能性を秘めていますが、負の側面もあるということです。デジタルカルリアルか、それからデジタルか紙かといった二項対立に陥らず、デジタルの力でリアルな学びを支えるといった基本的な考えに立ち、バラ

ンス感覚を持って積極的に取り組む必要があるとしています。

それでは、「今、求められる子どもたちの学びについて」は、そもそも現行の学習指導要領では、どのようなことが求められているのかということについて確認させていただきます。資料2を御覧ください。

学校教育活動の目指すところは、図の上部にある3本の柱で整理されている資質・能力、こちらの育成になります。「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」、それから「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」ということになります。現在はこの資質・能力を獲得するために様々な工夫がなされています。この資質・能力ですけれども、どのように学ぶかということも大切にされておりまして、それが右下の部分、「主体的・対話的で深い学び」ということになります。これまで国立も含め、様々な学校がこの視点で授業改善に取り組んできたといったところでございます。

この「主体的・対話的で深い学び」については、多様な子どもたちの全て誰も取り残すことなく行えるようになるための手法ということで、それが本日のテーマの1つでもある「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という形になります。

資料3を御覧ください。「個別最適な学び」については、一定の目標に対して個々の児童生徒の状況に応じて異なる方法や教材、学習時間などで学習を進める「指導の個別化」というものですね、左下の図のところですよ。それと、児童生徒1人1人が自らの興味・関心等に応じて、学習内容や学習方法を選択できる機会を提供し、探究的な学びを深めていくという「学習の個性化」、これがございまして、これは個々の学びを深めるだけでなく、他者との関わりを通してより深い学びにしていけるというのが協働的な学びという形、これらを一体的に取り組むことが今必要とされています。

国立市の取組例です。資料4を御覧ください。今、各地で様々な実践がなされて情報発信をされているところでございますけれども、国立市の学校においてもそういった取組を参考にしながら独自に先進的な取組を行う事例が報告され始めています。ここでは、様々ありますけれども2点ご紹介させていただきます。

1点目の事例は、国立第八小学校の体育の実践です。体育は、運動が苦手な子、それから得意な子、また嫌いな子、好きな子と、いろいろなお子さんがいるわけなのでございますけれども、そういったお子さんたち誰もがともに楽しく学べるようにするというところを目指した実践、ゲーム領域で行っていました。互いのチームで話し合い、児童が自分たちで毎時間のルールを調整するということをして、運動が苦手な子も含めてみんなが楽しめる内容にしていくという授業です。これは自分たちで学びの方向や内容を調整していく営みというところに価値があると考えます。教師は指導というよりは子ども同士をつなぐ役割を果たすことで協働的な学びの形になるように後押しをしていると、そういった授業でございました。

2点目の事例は、国立第三中学校の国語の実践です。複線型の授業により学習の個性化、こちらを図った実践になります。教師が前面に立つのは単元導入時、このときにガイダンスをしっかりと行い、課題解決の内容や方法を自ら選択できるようにし、子どもたちに見通しを持たせて、生徒それぞれがそれぞれの方向で学びを進めるという実践でありました。ここでも友達の考えを比較して、気づいた点を基に自分の考えを修正する場面があるなど、協働的な学びを引き出す工夫が見られました。中学校の授業というのは、前を向いて黒板に書かれたことをノートに写し、それをしっかりと頭に入れるという授業が一般的であった中で、こういった授業スタイルによって、個別最適な学びと協働的な学

びの一体的な充実を図っているという、こういったことが見られ始めているというところです。

ここでは紹介できませんが、歴史や理科、それから算数の教科指導などにおいても複線型や自由進度学習によって、個別最適な学びを行っていきこうという機運が今、国立でも芽生え始めている。こういったところになります。

続いて、本日のテーマでもある「GIGAスクール構想による1人1台端末環境の活用」についてです。資料5を御覧ください。これまでの成果については、学力調査等においてもICT機器の活用において効果が見られている項目があるということ、それから学校だけでなく不登校児童生徒や特別な配慮を要する児童生徒の学習機会の保障にも役立てているというところが大きな成果という形で紹介されています。

一方、急ピッチで導入を進めたことで、地域・学校間で大きな活用の格差があるというところ、それから、端末の更新や学校のICT環境の改善も必要ということで、これも令和7年度、本市についても大きな課題になるところでございます。また、子どもだけでなく校務のDX化というの、民間に比べれば学校というのは本当に遅れているところがありまして、そのことが授業づくりなどにも影響を及ぼしているといったことが課題として挙げられております。

国立市の状況です。資料6を御覧ください。今回は子どもたちの学習環境について確認をさせていただきます。主に活用しているのがベネッセ社の学習支援システム「ミライシード」、そして学習プラットフォームとしての「グーグル・ワークスペース」という形になります。これらの環境を1人1台端末の中で駆使して今、授業づくりを進めているという形になります。

資料7を御覧ください。学校の取組例です。1人1台端末が導入されたことで、まず大きく進展したのがインターネットを活用した探究学習の充実です。1人1人が様々なインターネットの情報や学習コンテンツに直接アクセスが可能になったということで、複線型の授業であるとか自由進度学習、こういったものにチャレンジが可能となっております。ミライシードのドリルパークは、完全なものではありませんが、AI型のドリルというものでございまして、これまで紙の一律の内容を繰り返し行っていくという教育学習から、個に適した学習が進められる環境が整ってきている、こういったことがございます。

協働的な学びについても、1人1台端末が有効活用されています。児童生徒が考えを端末上に書き込み、それを提出すると教員が全員の考えを一覧で確認ができたり、大型画面で表示したりすることがありますので、考えの比較であるとか議論の活性化、こういったものにつなげることができています。クラウド上の共同編集機能によって、グループでのレポート作成やデータ分析なども協働的な学びを後押しさせている状況です。これらの活用方法は、市教委主催の情報教育推進委員会において、過去の活用方法を共有することで、1人1人の教員が有効活用できるようにという配慮をしているところです。

続きまして、本日のテーマの3点目、「多様性を包摂し、一人一人の意識を高め、可能性を開花させる教育の実現」についてです。資料8を御覧ください。先ほども御覧に入れた図ですが、現在、教室にはこのような形で多様な児童生徒が在籍しているといった状況がございます。文科省の諮問では、多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程の在り方が必要ということで、これは資料9になります。子どもが自ら自身の学びを調整し、教材や学習方法を選択できる学習環境のデザイン、こういったものであるとか、それから標準授業時間数に係る柔軟性、1つの教育課程では対応が難しい子どもを包摂する仕組みづくりなどについて、今、議論が進められています。こういった個々の現場の対応だけ

でなく、仕組みや制度のところについても多様な子を包摂できるような体制ができないかということ、今、諮問を受けた文科省の中教審で議論がなされているところでもあります。

では、国立市はどうしているかということで、資料10を御覧ください。この多様性を包摂する取組ということについては、国立市としては先進的に取り組んでいることが多々あると考えております。昨年8月より採用した教育環境コーディネーターは、それぞれの状況に置かれた子どもに合わせた支援ということで教室内の机の配置であるとか、ユニバーサルデザインの授業づくりについて、教員と一緒に考えていく。そういった形で既に学校・学級の包摂力を高める教員研修なども実施しているといったところになります。これは、まだ全校で活用できているわけではないのですが、ここで様々ないろいろな知見が高まってきておりますので、それを共有化することによって、1つの学校の実践が他校に広めていけるように、ということを考えているところです。

各校がそれぞれに取り組んでいる包摂力を高める取組というものについては、令和7年1月に開催した教育フォーラムの中で実際に紹介し合っています。全11校の実践から得られた知見といたしましては、大人があれこれと決め込むのではなく子どもの声をしっかりと聞くこと、そして、困り事を個人の要因とはせずに、バリアに対して周囲の環境をどのように調整することで軽減できるのかと考えること、いわゆる社会モデルの考え方を取り入れること。それから、これは間接的にはなるのですが、教員のウェルビーイングというものが向上していないと、様々なことに挑戦したり、新たなことをやっていくことができないということで、これは学校で包摂を高めていくという意味では、なくてはならない視点ということで、これは教員の働き方改革も含めて様々な調整をしていく必要があるということを考えているところです。

今回、時間が限られているので、本市の取組は限定的なものになっておりますが、現状、国がこのように考えている、そして国立については、その点について現状このように進めているというところをご紹介させていただきました。様々なご意見を頂きながら、学校現場の実践等を進めていきたいと考えております。

報告は以上です。

◇

○ 意見交換・質疑応答

○【橋本教育部長】 ありがとうございます。事務局からの説明は以上でございます。ただいまの説明に対する質問も含め、市長を座長としてフリートーキング形式で協議をお願いしたいと思います。それでは、濱崎市長、よろしくお願いいたします。

○【濱崎市長】 では、事務局から説明ありがとうございました。次第に議題が3つありますけれども、それに沿って意見交換できればと思います。

まずは、1つ目の「GIGAスクール構想による1人1台端末の活用について」というところで、これは事務局に質問したいことがありましたら、ぜひ聞いていただきながらフリーディスカッションできればと思います。

まず私からですが、このGIGAスクール構想のところ、私は学校現場の経験がないものですので、よく現状を確認したいと思っています。GIGAスクールについては、メリットがしっかり確認できているかということと、あと副作用みたいなものがないのであれば、通信環境整備、こういう物理的なハードの面も含めてしっかり進めていくべきだとすごく思っております。例えば、資料5に書いてあるような、これまでの成果とか課題と記載があるのですが、成果として本当に認識していいのかと

ということ、よく言われる「誰一人取り残されない学びの保障」というところで、デジタルツールを使うことで本当に取り残されないということが実現できているのか、その授業で分かりにくいところがあったときに、もしかするとアナログでの対応のほうが目が行き届く面があるのではないかと。

あと、私、特別支援では、ゲームのようなことをこのGIGAスクール端末を使って学んでいて、効果的にできている面もあるなと思ったりしたのですけれども、本当に全てのお子さんにとって、「誰一人取り残されない」という観点から、成果として認識して問題がないのかというところが気になっております。

あと、ここに記載されていない課題がないかも気になっております。

端末更新とか学校のICT環境の改善がされていけば、あとは、授業上先生が使っていくかの問題で、そこが進めば、GIGAスクールは進んでいくんだ、という形で資料には書いてあると思うのですが、そもそもこれをやること自体の是非みたいなことがあまり問われていないのではないかと、その点も気になりました。これについては、長くやられてきているので、議論され尽くしたということかもしれないですが、その辺り、事務局に教員経験者もいますし、教育委員の先生方からも忌憚なくご意見をお伺いして、そもそもこれ自体がどうなのかなというところを、まず認識したいと考えています。

その上で、やはり進めるべきだということであれば、進まない要因は何か、通信環境なのか、それとも授業の工夫みたいなのところだとしたら、どうすれば進むのかというところは、もっともっと市としても追求すべきと考えております。

私の意見、非常にざっくりとお伝えさせていただきましたが、この後はどうでしょうか。順番とかではなく、フリーでいいですかね。

○【操木委員】 フリーがいいのではないですか。

○【濱崎市長】 フリーにしますか。

○【雨宮教育長】 事務局には聞かなくてもいいですか、成果とか。

○【濱崎市長】 そうですね。事務局で認識しているものがあれば。

○【荒西教育指導支援課長】 よろしいですか。資料5にある国レベルの課題という形になっているのですけれども、実際、我々が導入したときに一番大きな問題だなと思ったことが、やはり様々な情報が一気に入手できるようになりますので、情報モラルというところの教育の必要性というのをものすごく強く感じました。教員が分からないところで、どんどん、どんどん、いろいろなことが進展していってしまうので、指導するほうに追いつかないという、そういった状況が最初に見られたところがあります。かといって、そういうことができないから、では使わせないようにするという発想を今、改めているところでありまして、まず使ってみて、また課題が出てきて、それを1つ1つ対応してということです。

それから、子どもたちが自ら自分たちで判断できる、できてしまうけれども、これはやってはいけないことだということを自分自身で判断できるような、そういった力をつけていくことが必要という形で、今、情報のリテラシーの教育とともに情報モラルはセットにして、確実にやっていかなければならないというところが大きなところになると考えられています。

もう一方で、これは教員側もそうなのですが、教員側はアナログがこれまで主流で慣れてきているので、どうしても黒板とか貼り物、掲示物とかでやることに慣れているという状況があります。この辺りが、授業を理解するのに紙で書いてあるもののほうが理解しやすいのか、デジタルが理解しやす

いのかというところは、やはり今も悩みどころもありますが、今、研究が進んでいる脳科学の研究で言うと、現代の子ども、これだけデジタル環境の中で過ごしている子どもにとっては、デジタルなものの方が頭に入ってくることもあるということなのですね。我々は本当に印刷して、プリントアウトしないと物が見えない、頭に入っていない、ということはあるのですけれども、今、大学生でもノートがみんなデジタル化されていて、そこに記録したりとか参照したりとか、いろいろなことをやっていくということが当たり前になってきているところがあるので、そういったところも含めて、今の子どもたちにはデジタルを使わせる環境というものをしっかりと提供していくことは必要なのかなと思います。

一方、デジタルだけにするという形で、他国ではなかなか学力とかの向上に結びつかなかったという話もありまして、これは先ほどもお話ししましたが、リアルな学びというものをしっかりと支えるツールとして有効活用していくという観点で使っていけば、決してマイナスなものではないのかなということが、事務局の見解としては思うところでございます。

すみません。見解としては以上です。

○【雨宮教育長】 どうしましょう。

○【濱崎市長】 では、こういう形で。大野委員。

○【大野委員】 私は、GIGAスクールというか、パソコンとか、それが不得意で、よく分からないのです。教員であったときには、はるか何年も前なのでなくて、これからのことは聞いた話なのですけれども、そのGIGAスクール構想を取り入れよう、といって、コロナになって早まって、それで日本は随分短期間で1人1台の端末がそろった、これはすごいことらしいのです。そう言われています。それから、この間、ある教員と話をしたのですけれども、今や児童たちは、まさに文房具、消しゴムとか鉛筆のように使いこなす。ちょっと分からないと、それをさっと調べることが身についている、と言っていましたので、今の子どもというのは道具として使える素地があるのだなということを聞いて思いました。

それから、せっかく持っているのが私がぜひこのように使えばいいなと思うのは、1人1人が持っている、教員と「僕は苦しいよ」とか「こんなことを友達がやっていたよ」とか、そういう教員との連絡のツールとして使えばいいなということを言っていた人もいたのですよ。全部これは聞いたことなので、自分からの意見ではないのですけれども。それを聞いていて、なるほど、そういう使い方をする、子どもが困っているところが如実に分かるのかなと思いました。

あと、重い。これは低学年などだと、国立は多分、学校に置いておいていいよという学校と、それから、持ち帰りという学校と分かれていると思うのです。だから、端末を持って、紙の教科書も入れて、相当な重さだと思います。だから、この辺をどうしていくのか。簡単に学校に置けばいいといっても充電の関係もあるし、学校に置いておけばいい、とそれだけの話で決まるわけでもないと思うので、この辺が課題かなと。

また、次の買い換えの時期も、機械が壊れてくるので、古くなるので、それもあると思うので、そうすると若干は軽くなるのかもしれないのですけれども、そういうのが今、課題にあるということ。

だから、私の意見というか、知っているのはそのぐらいで、ただ、先ほどもありましたけれども、北欧で、デンマークにしてもスウェーデンにしても相当進んでいるところでは、学校で取り入れているのかどうかは知らないのですけれども、SNSを禁止したとかありますよね。それによる使い方の弊害か、そこは詳しくは分からないのですけれども、その辺は精査していく必要があるのかなという

気がするのと、ほかにもあるのですが、ざっと言ってそのようなところです。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。篠原委員、どうですか。

○【篠原委員】 もう、G I G Aスクール構想をやめます、パソコン、デジタル、D X化をやめましょう、とはもうならないと思うのです、今の時代の流れからすると。ですので、これをいかに有効なものとして利用していくかという方向にやはり議論は集約させていかないといけないのではないかと思います。先ほど市長がおっしゃった、「誰一人取り残されない学びの保障」というところ言えば、これはコロナを意識したコメントだと思うのですね。つまり、学校に行けなかったけれども、こういうものをいち早く取り入れた市町村では、子どもたちにすぐプリントを配信できたりして、「どうしたらいいの」という時期がとても短かったと。そこでもやはりいろいろな差があったという報道もありましたし、その意味で言うと、例えば遠隔地であれ、それから、人口の集中とかそういうことも含めて変わっていく中で、やはりこのツールというのは使わざるを得ないのだらうなと思います。かつ、その使い方ということだと思うのですけれども、例えば、本を読むのであっても、デジタルで読んだほうがいいのか、リアルのほうがいいのか、紙の感触が、とか、いろいろな意見がある中で、やはり学校の中で何をミニマムのレベルとするのか、というところが恐らく考える必要があることなのかなと感じています。

この後、というか、A Iがどんどん社会に入っていく中で、今のレベルではないような状況できっと、このI C Tは様々なことができるようになっていくのだと思いますので、そのときにやはりその正しい使い方といいましょうか、先ほど荒西課長からもありましたけれども、メディアリテラシーとモラルですね、その辺りのことをきちんとやるということ。あと、学校への攻撃とか、そういうことがないとは思いますが、そういう形でのアタックについて、どうやって守っていくのか、とか。そういう課題というものはあるのではないかと感じています。特に私は映像を扱っていたので、A Iのフェイク画像ですか、あれについては、本当に自分ではどうしたらいいのか分からないと思いますが、危機的だなと思ってしまして、子どもたちのような年代でこれが本物だとすぐ思ってしまったときに、どういう反応を示していくのだろう、とか、その辺りは本当にこれからの子どもたちは大変だろうな、という気もしております。

あと、最後に、教育D X化というのが書いてありますけれども、やはりいろいろな意味で学校の職員室もこういうことになって、ペーパーレスですとか、そういうことができる素地はもう整っているし、国立の中でも先日見せていただいた小学校でも、本当に職員室かなと思うほど、ほとんど紙がないような状況というのもありましたので、先生方の働き方の改革を後押しするためにも、使えるものはきちんと早めに使っていったほうがいいのかと思っています。

以上です。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。今、お話を伺っていて、資料6にある「学習者用eポータル」というのが真ん中にあると思いますけれども、ここに「C a n v a」というのが右側にありますが、私が育成会で八小のお手伝いに行ったときに、5年生とかもC a n v aで発表のスライド集を作っていました。C a n v aはレベルがそこまで高くない生成A Iみたいなもので、デザインとかを勝手にやってくれます。2年前ぐらいで、既に、子どもたちは普通にそこまで出来ているような状況になっていたのも、多分、そういうことをもっとやろうと思えば、子どもはできると思いました。ただ、発表をするとき、モニターがなかったので発表は声のみでやっておりました。先生がモニターを用意していなかったからなのですが、子どもたちは端末を持って、C a n v aでみんなて通信して、

同じ画面共有できるので、みんなで共有し合ったのを見ながら声でしゃべる、みたいな感じ発表していました。そういう工夫というのがどんどん進むといいのかなと思ったりもします。

デジタルリテラシーは本当に必要だと思います。C a n v aにもどんどん機能が充実していったってフェイクが作れるレベルになり、それでいじめみたいになってしまうと、本当に大変だと思います。別にC a n v aにすごくこだわっているわけではないのですが、先生方は、どのくらい新しいアプリなど使ったことがあるのか、その辺りはどうなのでしょう。子どもたちのほうがどうしても、スムーズにやれてしまう面もあるのかなと思います。

○【小島指導担当課長・総合教育センター所長】 ご質問いただいたC a n v aについては、学校の中ではごく一部の先生方が使っているというような状況があります。これは知っている、知らないというところが一番大きいかなと思っています。これは教育D Xにも関わるところで、学校の教育D Xがなかなか進まないところの要因の1つは、教員のデジタルスキルが向上していかないというところが1つあります。

それは何かというと、まず端末を使わないというところが一番大きな原因ですね。教育D Xが国立市内の学校を見ても、進んでいる学校と進んでいない学校というところが両極にあるかなと思っていて、進んでいる学校は積極的に端末を活用していくという校長の旗振りの中、進んでいるところがあると。そこによって教員が使うようになると、副次的に当然子どもたちも使うようになっていくという流れが、このG I G Aスクール構想が始まって4年間を見ていると、そういう傾向が非常に大きいかなと思っています。逆はやはり逆の状況で、教員が使わなければ子どもが使うことはしない。その一番の弊害は、安全ではないかなというところが一番大きいかなと思っています。

ですので、その辺りは非常に今、C a n v aの話から派生しているところですのでけれども、1つは知っている、知らないというところ、あとは先生方がどれだけ活用していったのかというところ、子どもが活用して先生が活用しないという構図はまず生まれないかなと思っていて、これは両方同時のペースで進んでいくものと思っています。一番大きなところは、やはり子どもをどこまで信頼できるかというところは非常に大きいかなと思っています。これは今までの様子を見た中で、学校が保守的になる一番大きいのは安全というところを気にするがゆえにというところかなと思っています。

○【濱崎市長】 お話をお伺いして思いましたが、D Xで教員のところに課題があるのであれば、今、教育大綱にデジタルツールとかG I G Aスクールみたいな記載はあまりなく、大綱を見たときには、積極的にそういうことをやっていこうとは見えない形になっております。

先ほど篠原委員がおっしゃったように、これは進めないといけない話であって、どう進めるのかという議論に集約するというのであれば、大綱としてどのような示し方ができるのか、あとは具体的に研修などをどう充実するか、好事例を横展開していくのか、など、そういうことが大切になっていくと思いました。

操木委員。

○【操木委員】 私も先ほどの資料6の中のC a n v aの下にある「NHK f o r s c h o o l」にちょっと関わることが多くていろいろ、その関係で全国の実践例を私も見させていただくことが多いのですが、そこで感じるのは、二極化しているんですね。つまり、かつて視聴覚教材と言われたときに、それもどんどん得意な先生が行って、どんどん深まっていくんですね。今、こういった会議に出ても、何を言っているのか私もよく分からないことが、専門用語が飛び交うような会議に今

なっているのです。やってきている人はどんどんどんどん新しいものを吸収していくし、また意欲もあります。ところが一方で、やはりやりたいのだけれども自分の授業で使えないとか、ちょっと前まではいろいろな研究発表などに行きますと「明日の授業でこれ使えるな」という、そういう学びがあったのですけれども、すぐにはできないな、いいけれども自分にはできないな、ということで、すごく教員というか、学校の中の現場が二極化していることはあるのかなと、それは感じています。

それから、この前行った学校でも少し話をしたのですけれども、少し前まではトークとチョークは古い授業だという話が出ていたのですが、いよいよそうでもないなということも感じて、やはり両方うまく使っているなど、そういう人たちもいるということで、子どもたち、今日は多様性とか1人1人違うのだという話も出ていますが、やはり教員も1人1人違いますし、ある学習の場面も、場面、場面によって違うのですね。デジタル的なものを使っても即効果的でもあるだろうし、アナログでいったほうがいい場面もあるし、それから、この子にはこちらのほうがいい、という、そういう多様性もありますので。

ですから、学校を回って、1つの教室に全員がタブレットとかで座って見ている授業は、あれは違うな、といつも思うのですね。ある子はタブレットで見ていてもいいと思うし、ある子は資料を見て広げてみてもいいし、ある子は教室を飛び出して図書室に行って調べてくるとか、もっと極端に言って、許されるならば学校飛び出して地域に行って聞いてくるとか、そういったことがあるのが本来の理想の姿だと思うのですね。ですから、私もずっとこういった教材が大好きでやってきているのですけれども、ちょっと待てよ、と思うと、周りについてきている人がいないとか、そういうことがあるので、そこに気をつけなければいけないなと。この中でも、例えば小島課長はすごく詳しいのですけれども、やはりついていけなくなってしまう、私も。だから、詳しい人は詳しい人ほど優しく説くということが大事かなと思いますので、よろしくお願いします。

それで重さの話が大野委員から出たのですけれども、私も、明日、実は会議にノートパソコンを持っていかなければいけないのですね。嫌だなと今思っているのですけれど。行くたびにパソコンを軽いものにチェンジしているのですが、非常にお金がかかってしまうのですよね。そこでちょっと考えたのは、学校に置いておくとか、学校に持ってくる必要があるのかなと思うのですね。

変なことを言うようではございますけれども、コロナ禍のときに端末はみんな家庭に置いていたじゃないですか。そして学校から配信して、子どもは家庭で使っていた。そうであれば、では、300人の子どもがいる学校で300人が同時に使いますか。使わないですよ、実を言うと。だから、2クラス、3クラスが使う、学校でも違うと思うのですけれども、全員分がなくてもいいのです。だから、端末は家庭に置いて、学校では学校の物を使ってクラウドでつなげればいいと思うのですよね。そうすれば、すごく効率的ですし、持ち運びもないですし、安全な面もあります。だから、本当にクラウドをうまく使ってやればいいのかと思うのですね。私も今、実際自分の家庭でパソコンを使って、職場で使って、出張先で使うことあるのですけれども、全部クラウドに飛ばしますので持ち歩かないですよ。だから、そういった方法を考えれば、子どもたちもいいのかな。

いずれにしても、IT環境の話も出ましたけれども、お金で解決することはそんなに難しいことではないです、お金さえ探してくれば。とにかく、このお金よりも人を広めるといふか二極化を。広めて、深めると、その両方が進めるといいかな、なんて、ちょっとまとまりませんが、今のところそのような考えでいます。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。まさに運用の仕方というか、確かにクラウドでつなげれば、

学校にあるのは使いやすい別の端末でもいいのかもしれないですね。あとは、予算とやりくりの問題で、多分、授業時間をうまくばらさないといけないなど必要になると思いますので、そういう運用面がうまくいけば、積極的に考えたほうが子どもたちの負担の面でよいと思いました。

佐藤委員、どうでしょうか。

○【佐藤委員】 本当に子どもたちの道具を使いこなす力というのは、すごく深いなと思っていて、大学生などは本当に何でもレポートも提出、全てパソコンからだったり、自分の持っている道具から発信するとなっていると思いますし、C a n v a もすぐに使いこなして、すてきな写真を作ったりとか、そんなものがすぐにできてしまう。もう大学生レベルでもそのようなレベルになっていると思うので、新しい先生たちはすぐに子どもたちと一緒に使いこなせるのではないかなと思います。あと、ドリルでいうと、1人1人に対応してくれるので、先生方が何十人も見ている中で別々に見るとするのはすごく大変なものを、ドリルによって進み具合、その子に合わせた形で進めて、進路を考えながらやってくれるというのは、すごくいいことだなと思います。

1つ気にかかっているのは、中学生の不登校の増加に当たって、オンラインで授業を受けられるとか、おうちでオンラインで学ぶことができるというのは1つよいことな反面、一方で、なかなか人と接することができなくなったり、そういう時間が多くなったりとなると、人が怖くなったり、社会に出て行きづらくなったり、ということがあるのではないかなと思っていて、A I に頼る部分と、人と楽しく学ぶというところも少しずつステップアップしていけるようなサポートができるような学校の学びであってほしいなと思っています。

今、おうちにずっといるという中学生もいたりするので、何か体験したりとか、一緒にご飯を食べるとか、そんなことができない状態にしないようにサポートしていくといいのかなと思っているのと、デジタルで動画を見て、風景は分かるのですけれども、やはり匂いが分からないし、どのくらいの温度なのかということも分からないし、そういう面ではきちんと触って、体験して、体感してというところは、このデジタルの時間以上につくりたいなと思います。

道具として使いながら、バランスがすごく大切かなと思っているのと、子どもたちの中には、先ほど操木委員もおっしゃられていましたけれども、見て学ぶ子もいれば、聞いて学ぶ子もいれば、書いて学びたい子もいると思うので、そういった自分の得意なものを、その道具を使いながら理解するという力を高められたらいいのかなとも思います。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。今おっしゃっていただいたように、オンラインとリアルとの2つを別ではなく、不登校のオンラインをどうリアルに接着していくか。その子のケアとか、あと、オンラインで学んだことをどうリアルに、多分学校だけではない関わり方をするところもいっぱいあると思うのですけれども、その点は非常に大切だと思いました。

オンラインを使うメリットがあることを、よりどう生かして、ケアが必要な面はケアしていくという視点かと思いました。あとは、インクルーシブの事例で、書けないお子さんがオンラインのG I G A スクールで授業に、との記載もありましたが、メリットをどう生かすかという視点、本当に大切だと思いました。

教育長、いかがですか。

○【雨宮教育長】 やはりこれからの時代を生きていく子どもたちの社会環境というのは、人口減少社会にあって、ますますA I とかに依存していく。それから、ソサエティー5.0 みたいなものがリアルな時代になると思いますので、そういう意味では、その環境に今の子どもたちがついていけるよう

なことは必要だろうなと思っています。ただ、やはりそれだけで済むわけではなくて、先ほど佐藤委員もおっしゃっていましたし、操木委員もおっしゃっていたように、人それぞれにできる、できない部分があったり、こちらのほうがいい、いや、こちらのほうがいいというのは違うので、そこは柔軟に対応できる環境を作っていかなければいけないのかなと思います。

これから少し話はずれますけれども、デジタルの教科書が国はそれでやるのだと決めてしまっているところがあるのですけれども、各市教委が決める、デジタルでいくのか、紙でいくのか、両方使うのか、とか、そういうことが求められてくると思いますので、我々はそのメリット、デメリットという言い方をしているのかどうか分かりませんが、そこは判断していかないといけないのかなと思っています。

ここで機器が一斉更新という形になってくると思いますので、このことをやめるということは、国が全員に配ったということをやめるということはないと思いますので、ツールとしてしっかり使わせていただくような形でやらなければいけないのだろうなと思っています。

今、思うと、すみません、自分のことですけれども、体育のときに、本当に昔の話ですが、跳び箱で前転するというのがあるじゃないですか。全然できなかったのですよ。ああいうのは今、多分、画像にしてもらって見せてもらえば、どこが悪かったというのはすごく可視化できて、自分なりに頭で理解できたのかなと少し思ったりもしたところです。

以上、ちょっと蛇足ですけれども、そのような感じになります。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。

すみません。もう少しちゃんと問題意識をお伝えすればよかったのですが、あえて問題点みたいなものがあれば、ということで少し伺いましたのですけれども、やはり皆さん、基本的には使っていったほうがいいということで、最後、教育長にまとめていただきましたが、その中での特段の問題点としては、情報リテラシーとか教員の活用のところをどう支援したり、促していくのか、というところとか、あとは不登校とリアルをどう接着していくかということなど、使うことによる問題を、どうケアしながら取り組むかというご意見だったかと思います。

これだけGIGAスクールが重要な構想だったり、ツールとして現場で出ている状況ですので、教育大綱に記載がないのも違和感があるなとも思いましたので、今、頂いたようなご意見を踏まえながら考えていければ、と思いました。

続いて、次の話題の「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」です。手法でいうと、今扱ったGIGAスクールも、ドリルのことだったり、最適な学びということで、ツールとしてデジタルが有効なお子さん多数いらっしゃる、あとは不登校のお子さん多数いらっしゃる中で役割が大きいということでしたが、デジタルツール以外について、今の課題感とか、あるいは、今後こういうのを充実すべきではないかというところを議論できればと思うのですけれども、事務局のほうから、今の国立市の課題感とか特徴的なことがあれば、お話ししたいのですが。

○【荒西教育指導支援課長】 この「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」については、先ほど挙げられたようなデジタルツールを活用していくことで進展していくというのは大きなところでありますが、一方で、この授業づくり自体を、そのツールとして活用しつつも、どこに効率をもっていくかというのが今後の授業改善の大きな視点になってくるかと思います。子どもの興味、関心や、子どもが選択できる、学びを自分たちで調整できる、というような、そういうことを支援していくというのが教員の立場なのだ、という認識に立つと、また授業感が随分変わってくるのかなとい

うところがあります。

これまではそれをやりたくてもできなかったのですね。ただ、今、1人1台端末ができたので、そういったことも組み込めるようになったところがありますから、その教員の意識変革とか、新たなチャレンジみたいなものが、やはりこれを進める上で一番大きな課題なのかなと思っています。

以上です。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。「個別最適な学び」とか「協働的な学び」という前に「主体的・対話的で深い学び」というのが学習指導要領上はあるのですが、今の文科省の問題意識では、主体性のところが狙いほどの成果は多分出ていないという認識に立っている状況です。そして、学び方の手法でいうと、この資料4にあるような、各自治体でこういう取組が始まってきている、そういう状況かと思っています。私も自分の頃の教育と比べると、かなり現場が変わってきているなど、昔過ぎて比べるのもあれなのですが、全然違うなと思いつつ、やはりこれだけ試行錯誤を続ける中で、なかなか進まない面もあるというのは、正直どうすればブレークスルーできるのか、なかなか難しい課題だとも思います。

先生方も、ゆとり教育の頃からある程度、こういう路線で授業改善みたいなものを多分されてきて、主体性は今も引き続き求められているけれども、まだ国際的には足りないみたいなことも言われている状況です。

いい事例があって、それをしっかり教え合うことで広がるのであれば、そういう努力をもっと継続強化すべきだと思いますし、それ以上のものが必要なのか、中々難しいでしょうけれども何か新しいよいやり方が必要なのかとも思ったりしますが、現場を経験されている方から意見をたくさん頂ければと思っています。

また、順番で、大野委員、お願いいたします。

○【大野委員】 直接のこれらとは違うと思うのですが、今の何をどう変えていくかという話ですけれども、結局、日本の国がどういう人材を必要とするかという、そういう社会構造とどうしても結びついてきてしまうので。そうすると、今まではずっと東大はじめ一流大学を出て、そこを目指して、というのが価値観にがちりあるのですね、求める人材が。いや、そうではなくて、これからAIも出てくるし、そんなの聞けば立ちどころに、そうではなくて、もっとどういったところを人材として求めるか、という、その社会構造が変わってくれば、大学入試の在り方も変わってきて、それに伴って小中高のその学習の在り方も変わってくるのだろうな、とも思うのですが。一方で、それは変わらない話を、私、冒頭で言ったのですが、両方考えられるな、という感じだから、それは何とも言えないです。でも、入試は変わらないかもしれないのですが、最近、俯瞰して思うと言ったのは、教員をやっているときは、例えば担任をやっている、今、誰々が問題を起こして何とかしなければいけない、そこでもう100%になるのですが、今、学校訪問をしますね、国立市内の、そうすると、最近感じるのは、やはり教員は1人1人の子どもを大切にする、1人1人の子どもに対して愛情を持つ、それが原点だな、ということを今になって、そう思うのですね、自分ではできなかったことなのかもしれませんが。

やはりそういった言葉というのは、学校長とか、この教育指導支援課というのが、国立は小さいかもしれないですが、私が見ていて、教育委員というちょっと組織の中に入るといえるのか、ちょっと外れている感じなので、すごくお互いを信頼し合っているというのは客観的に思うのですね、とてもいい関係だと。その中で学校がやろうとすることをバックアップするし、指導もするし、決して

対立関係ではなくて、学校側もすごくありがたがっていると思うのですけれども、そういった中で、昨日の朝日新聞の中にありましたけれども、文科省から、結構それぞれの学校で任される要素が今後増えてくると思うので、今、国立の中ではいろいろ思うようにやっている学校があるのは、大したものだと思います、それぞれのオリジナリティを持って。

一例で言うと、どうしてもクラス単位になれば、ぎゃあっと騒いでしまう子とか、話を聞かない子とか、それに対して教員は「おまえ、何やってんだ」と言うのが今まででした。でも、ある学校長が言うには、もう結構多様性が出ているので、ここにも書いてありますが、そういう多様性があるので、今までのような一律の「前を向きなさい」とか、あるいは「しゃべるんじゃない」とか、それでは聞かなくなっているというわけですね。だから、そういう中でいかにやっていくかということを突き詰めていったときに、どうしてもその子にはその子の事情がある。それが多様性を認めることだと思うので、それには教員の愛情だなと強く思います。

そういうことは、荒西課長とかが時々そういうことを言わないと、嫌がられるのですよ、教員は。だから、そうだな、それは大切な、愛情を持って接することは大切なのだと、当たり前だと思うかもしれないけれども、そういうことが私は今、大切だなと感じます。

すみません。長くなって、直接的回答ではないのですけれども、そう感じるのですよね。

○【濱崎市長】 おっしゃっていただいた愛の重要性、共感いたしました。愛があれば、1人1人の生徒に向き合うことにつながり、それが個別的だったり、最適な学びにつながる、そういったご指摘と理解しました。

○【大野委員】 そんな感じかもしれません。

○【濱崎市長】 結局は姿勢、向き合い方なのかなと。

○【大野委員】 そうですね。だから、先生が例えば、「A君、騒いでいるけれども、ちゃんとやろうね」と言うのは愛を持ってやっているな、というのは友達も分かるわけです。そうすると、それを見習って、その子に対していじめたりなどしない。Aに対して「A、ばかもん。おまえ、何やってんだ」となってしまうと、やはり友達がそういうことを。だから、そういうベーシックな話で、本当に話していても恥ずかしいのですけれども、改めて教員というのは本当に1人1人に愛を持って接しなければいけないと、教員を離れて今になると思うと、それが俯瞰して思う。でも、それが正直ちょっと強調したいところなのですよね。

○【濱崎市長】 長年のご経験から、その点がすごく大切だということ、私も受け止めました。大野委員が冒頭におっしゃったように、何を大切に学ぶかということで、画一的なテストが目標だと、どうしても画一的な授業になってしまうので、この資料でいうと、資料2の上の、何ができるようになるかということは今日の議論の対象にしていないのですけれども、ここが本来は社会全体で問われるべきだし、学習指導要領に書かれている内容があるとして、国立市としてそれをどう受け止めて、自分たちで決めるかということが大切だと思います。

私は市長という立場上、教育大綱に関わるところが気になってしまうのですけれども、教育大綱にはインクルージョン、共生社会など、すばらしいことを書いてあるのですけれども、それ以外の何を学ぶかということが、ややもすると記載が緩いように見えるきらいもあるので、やはり今おっしゃっていただいた、答えのない世界であったり、画一性ではないところで必要な能力、非認知能力が全部それだとは言わないのですけれども、その非認知能力的な部分とか、やはりそういうものをしっかり、ほかの市の教育大綱などを見ると、むしろそちらがメインで書かれているものもあったりするので、

もう少し、うちも広いことを書いてもいいのかなということは思ったりしています。なので、大野委員の問題意識はすごく大事だなと感じました。

○【大野委員】 一言思い出したのだけれども、もう 20 年以上前にアメリカに行ったときに、「ハーバードを出た」と言っても、周りはその頃から「S o w h a t ?」なんですよ、「だから、何?」。あれはハーバード行った、「S o w h a t ?」、だから何、だから、あいつら何ができるのだと。日本だと、いまだに何々大学出たというと、すばらしいと、そんな感じがあるのですよ。だから、アメリカのほうはハーバード出ようが、「だから何だ」「何ができるんだ」と。「パークレー出た」と言ったら、「S o w h a t ?」、だから何ができる。そういうのにやはり染まらないと駄目だなと。ごめんなさい、長くなりました。

○【濱崎市長】 そういう価値観はインクルーシブ教育とかいろいろなものにつながってくところがあると思いました。ありがとうございます。

篠原委員、いかがでしょうか。

○【篠原委員】 今、大野委員がおっしゃったことを含めて、今まさに変わっているのだと思うのですね、社会全体が。例えば大学信仰についても、一部の親たちの世代は、「いや、もうそれは」と思っているかもしれないけれども、そうではない人たちも結構な数があるみたいな、そういう状況だと思うのですね。それを一気に変えていくのはすごく難しいことだと思うので、では何で変わるのかと考え、やはり実例なのかなと。こういう人たちがいて、こんなことができたというのが世の中に喧伝されていくと、「ああ、そういうものなのか」というような気がちょっとしています。

この個別最適な学びと協働的な学びの話で言えば、やはりどこで個別最適のアプローチをしていくのか、まとまって、みんなで考えるところは何なのか、ということの 1 つ 1 つの授業での設計というのが、きっといろいろな経験を基に、先生方がだんだんだんだん積み上げていくものがあるのではないかなと。今まさに一斉授業から変わっている過渡期なのかなとすごく思います。そこでうまくツールを使って、実際に学校に行って実践されている先生もいらっしゃるのですよね。ですので、そういうことを大事にしながら、このような場合はこういうことができる、ということが、もう少し広まっていくといいのかなと思いました。

以上です。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。やはり教員の取組のいろいろな横展開が重要ということですね。どうしても、やればやるほど負担や人手が必要となる面はあるかと思いますが。

○【篠原委員】 はい。今、申し上げるのを、どうしようかなと思ったのですが、やはり。

○【濱崎市長】 でも、それを抜きに議論はしにくいと。

○【篠原委員】 そうですよ。教室の中での児童生徒の数ですとか、やはり担任の先生方がケアできる範囲というのがあって、もう一歩、本当は少なくてもいいのかなというのが実感としてあります。

○【濱崎市長】 逆に言えば、そういう制約で、事例は知っているけれども、やりたくてもやれない、という要素が強いような現状はあるのでしょうか。その辺は事務局も含めて皆さんどうですか。やれるならやりたいけれどもという感じなのか、そもそも事例が知られてないというのと、どちらなのでしょう。

○【荒西教育指導支援課長】 よろしいですか。この後ある包摂の観点ということと、あと、1 人 1 人の力をしっかり身につけていくという観点からすると、今の数というのは多くて、本当はもっと目

をかけてあげたりとか支援したいのだけれども、実際的には1人では無理というところは本当に実感としてはあるところかなと思います。

○【濱崎市長】 やはりその点を抜きにした議論は、現実的なものになっていかないと思いますので、大事な問題だと思います。

操木委員、どうでしょうか。

○【操木委員】 昔は、よく教室に行って、静かに先生の話の聞いたりしていると、「この先生は力があるな」とか、「いい授業をしているな」とか、そういう評価があったのですよね。ところが、だんだんだんだん変わってきて、今、学校訪問しても、私も静かな教室は全然面白くなくて、本当に騒がしい教室は、「いい勉強しているな」と感じるのですけれども、このようにだんだん変わってきているのですよね。それは、やはりこの「主体的・対話的で深い学び」と、この言葉もやはり現場には浸透してきているのですよね。だから、授業を主体的に考える時間もあるし、それからグループでもって対話するところもあるし、全体で深めていく。そういう場面ができてきているので、やはりキーワードというのはすごく大事ななということを実感として思いました。

それから、大野委員からも出ていたのですけれども、価値観のことなのですから、どこで何を学んだとか、そういう価値観のことをずっと言われているのですが、なかなかそれが変わっていかない。ごく最近でも、卒業生のリストを見て「今年はいい学校に行った」とか、そういう話が出ていたときに本当に悲しくなりましたね。だから、そうではない、1人1人がみんな違うところに行くことのよさ、今は1人1人を大事にしていこう、というのと少し違うのではないかと、やはりそういうところは変えなければいけないのではないかと、せめて国立だけは、と思いますし、それはちょっと余談なのですから。

それから、あと、個別最適な学び、要するに、1人1人が大事にされるには、算数で今、少人数の授業を取り入れているのですけれども、あれは本当に自分の今の状態に合ったところを学ぶことができる、すばらしい取組だと思うのです。6年生に1年生の勉強はできませんから、6年生が1年生の勉強をするわけにはいかない。やはりその年齢とか状態に応じてできればいいわけですから、算数の少人数のようにステップでもって学ぶところができればいいかな。それが算数だけではなくて、全部の教科になればいいな。

そこではやはり、人が必要ですし、金も必要です。だから残念ながら、教育には人は要るし、教育には金も必要だと、人と金で教育が結構違ってくるところがあるので、できるだけそれに近いことを、また校内の工夫でもってできるので、教科担任制などもそうですね、それは校内でもって工夫することができる。やれることはまだたくさんあると思いますので、そういったところをお互いに研究して、発表して、交流して、お互いに高めていかれるといいかな、などと思いました。そのようなところでですね、すみません、まとまりません。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。やはり校内の工夫をしっかり持つことが重要だと。また、中々価値観的に悩ましいなと思ったのが、画一性を求めずに、ある程度個別最適に習熟度なり、習熟度を高める取組は正当に追求されるべきかなとも私は思っておりまして、学力なり、習熟度の向上を一切目指しません、というようなメッセージは、それはまた違うのではないかと、ということも考えております。かといって、それに偏重する形は一番避けるべきだと思うので、その辺りがすごく難しいのですが、どう伝えるか、すごく大切だと思いました。

今回の議会でも、その辺りの問題意識も出ておりまして、やはり市民にもそういう考えを持って

いる方は多くいらっしゃると思いますので、偏重ではないけれども、習熟の側面もしっかりと意識しての学校運営ということを考えていかないといけないと思いました。ありがとうございます。

佐藤委員、お願いします。

○【佐藤委員】 私は不登校の低年齢化がすごく気になっていて、そのスピードをどうにか抑えたいなと思っています。その中でちょっと部分的なところになってしまいますけれども、例えば低学年などでは、野外で算数ということも時々お話しさせていただいているのですけれども、そういったところで、学校の教室だけが学ぶ場所ではないのではないのかなと思っています、足し算をやるにしても、花の数を数えたり、落ち葉を数えたり、生き物が好きな子は虫を数えたりというところで、まず学ぶのは楽しいという、低学年のうちから学ぶことの楽しさを伝えるチャンスを広げていけたらなと思っています、それには、もしかしたら、先生方の裁量的な時間をもっと増やしてあげられることも必要ではないかなと思います。学校だけではなく、学校の校庭以外の外に出れば、もっともっと面白いものに出会えますし、地域の方に協力していただくということも、子どもたちにとってはすごく刺激的な時間になるのではないかな、ということも考えられるなと思っています。

低学年でたくさん赤で字を直されたり、そういうことが起きますと、本当に自分は駄目なのだと感じる子もいると保護者の方から聞いていて、そうではなく、少しずつできるようにサポートしていくのが学校での学びかなと思いますので、そういう子も1つの教科が苦手でも、ほかのものができた、そういった価値観で楽しい学びが広がっていくといいなと思っています。その子のよさを引き出すにはどうしたらいいか、というスタンスでできるといいのではないかなと思いますし、子どもは自分のできれば、できていない子だったり助けてあげようかなと思う気持ちも増えていくと思うので、そうすることで子どもたちが学び合えば、先生も子どもに対してのアプローチも減って、少し余裕ができたとか、そういう循環が生まれるような学びがいいのかなと思っています。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。不登校だったり、本当に個に応じた指導、対応が大切ということですね。そのために必要な、先生たちの裁量の時間だったり、別室教室とか多様な学び場だったり、結構、国とか都の政策に我々も翻弄されている面もあるとは思うのですけれども、そこを国立市としてできる限りやっていくというのは、とても大切だと思います。ありがとうございます。

教育長、お願いします。

○【雨宮教育長】 私は、基礎的なことはやはり身につけてほしいなとは思っていますけれども、それ以上に、児童生徒の興味関心、これを先生方には引き出してほしいなと思っています。ですから、その辺りが個別最適な学びなのかなと思っています。

今、不登校児童生徒が34万人みたいな、それは学びがちゃんとできていないから、という、子どもたちの無言のメッセージなのではないかなと思うのですね。学制がひかれて150年ということですが、その右肩上がりの社会から成熟の時代にありますから、教育の在り方も徐々に変わってきているとは思うのですけれども、先ほど大野委員もおっしゃっていましたが、本当に今ターニングポイントになってきているのだと思いますし、国もその辺り、きっと文科省は分かっているのだと思うのですよね。その辺りがいろいろ省庁の力関係などもあるのかもしれないのですけれども、一気にはいかないですが、やはり徐々にそういう方向性を、国は国ですけど、国立は国立で目指していければいいかなと思っていますところでは。

以上です。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。最後の多様性を包摂し、というところも、今、教育長がま

とめていただいた話とかなり関連するのですけれども、最後に論点だけお伺いしたいと思います。多様性の包摂ということで資料8・9に書いてあることなのですが、資料の9などを見ると、左上のほうに「子供による学び」ということで、どちらかという、個別最適な学びともかなり親和性があるようなこととか、あと、教材の話ではGIGAスクールと関係する。多分この3つの話題は全部その辺りで関係があるようなことかと思っております。

クラスに多様なこどもがいて、特に国立市は、インクルーシブ教育という形で先進的な取組を進めてきて、共生社会の実現ということでやってきたと思うのですけれども、今までの話とこれもかなり似たところがあって、教員の余裕の問題だったり、あるいは学級の人数の問題だったり、環境の面も相当大きいなと思っております。

この辺り、事務局のほうで、国立市の取組について、しっかりできているという捉え方もある分野だと思うのですが、課題にはどういうものがあると認識されていますか。

○【荒西教育指導支援課長】 国立市については、現行の教育タイプでフルインクルーシブ教育を掲げましたので、基本的には、地域の学校のお子さんは、地域の学校を選択したときに全力的に応援するというスタンスが、これは理念的に教育現場のほうも、そういったものだということがありましたので、そこの入り口のところで何かすごくハレーションがあることなく、取り組めたというところが大きかったかなと思います。その分いろいろ苦労はあるのですけれども、では、どうするというような、その場その場の現場の中で最善を尽くせるように考えていくような姿勢みたいなもの、こういったものはかなり浸透してきたなという実感があります。

ただ一方で、そういうふうにして、その子らしくいられるようにさせてあげたいのだけれども、現実的にちょっと人手的なものであるとか、それから設備的なものが追いつかないがために、教員も子どももなかなかうまく自分らしくいられるような場面をつくることができない、というような場面もやはり、ありました。そこが今、本当に過渡期でいろいろ試行錯誤しているような状況でして、今ある環境の中でできる最善というのは何なのかというところを手探りの最中なのかなと思います。

学校全体で包摂というものが進んできているような学校については、アイデアとか、こうしたらいいのではないかと、というようなプラスに働くイメージというのをもすごく持っていますので、そうした学校などの取組というのは今後、広げていけるかなとは思っていますので、まだまだいろいろなことができるのではないかなと思うところではあります。

以上です。

○【濱崎市長】 GIGAに関することも大分出てきたところだと思いますが、このテーマで最後何かある方いらっしゃれば。

○【操木委員】 包摂というと、違いを取り入れて、1つの中にうまく取り入れると、そういう考え方だと思うのですけれども、1人1人の声を聞いていかないと、と思うのですよね。つまり、一緒に同じことをやりたいという気持ちのときもあるし、今日はちょっと違うなと。だから、そういうことも1人1人の違いであるから、1人1人もそのときによって違うので、しかも、そのとき、そのときの1人1人の声をしっかり受け止めて、その子そのときに合った包摂ということを念頭に置かないと、何でもまとめればいいというものでもないと思います。

○【濱崎市長】 この6月議会の定例会でも、別室教育・指導の話、結構出ましたけれども、今の学びの環境の中に、そういう場所があることが、お子さんにとってより良い形であるというケースは多くあると思います。ニーズにあわせてといいますか、望む形にあわせて、なるべく最適となるあり方

を探していくというやり方のほうが、絶対にこう、とするよりはよいと考えております。

ほか、ございますか、最後。

○【佐藤委員】 文科省のほうで、この間、長野でもお話を聞いてきたのですけれども、40分授業で残りの時間を探究授業にするとか、教科書の分量を見直ししているということもあるので、できるところはどんどん国立は進めて、子どもたちが楽しく学べる環境をつくられたらいいなと思いました。

○【篠原委員】 一言だけいいですか。受け売りですけれども、IBMにいらして浅川さんという目が見えない方がいらっしゃいますよね。今、日本科学未来館の館長をされているのですけれども、彼女が言っていたのは、要するに多様性、目が見えなくても耳が聞こえなくても、その人が仕事をしていて当たり前だし、子育てしていても当たり前ということが、そういう考え方が、そういう世界になることが理想的なのだと。そのためのポイントというのはやはり統合教育であって、多様性という言葉を知っているということと、それを当たり前のように感じるということというのは違って、なかなか当たり前というところまでに行き着かないのが人間社会なので、その特性を持つ人が身近にいて、当たり前と一緒に生活して過ごす、そういう意味で言うと、国立のやろうとしているインクルーシブ教育というのは、私は意味があると思います。

それは、教育が教室の中のことだけではなく、やはり国立市全体の社会の中でそうなっていくことへの1つのステップになるのではないかなという気もしているので、そのことについては、やはり大事にしていってほしいかなと思っています。

以上です。

○【濱崎市長】 ありがとうございます。時間となりましたので、以上をもちまして終了としたいと思います。

○【橋本教育部長】 いろいろご意見ありがとうございました。予定した時間になりましたので、今日、様々頂いたご意見を事務局としても、それを踏まえて、教育行政、前に一步でも進めていけたら、と思っております。

それでは、最後に市長より閉会のご挨拶をお願いいたします。

○【濱崎市長】 皆様、大変ありがとうございました。時間が少し押してしまいましたけれども、大変有意義な意見交換、おかげさまですることができました。子どもたちの学びがより一層充実したものとなるよう、引き続き、市長部局、教育部局、連携していきたいと考えております。傍聴の皆様もお疲れさまでございました。ありがとうございました。

○【橋本教育部長】 ありがとうございました。

これをもちまして、令和7年度第1回総合教育会議を閉会といたします。どうもお疲れさまでした。

午後2時32分閉会